

学内広報

2025.6.24

no. 1595



「駒場リサーチキャンパス公開2025」先端研3号館にて（5月30日）



担当理事に聞く

コミュニケーション戦略本部とは？

東大創業者の会×東大基金×吉本興業×Googleのイベント

「知と革新のフロンティア共創」を開催

東大蔵元会×農芸化学者

伝統的酒造りシンポジウム&利き酒会を開催

コミュニケーション 戦略本部って ナンデスカ?



広報戦略本部からの改組について理事らに聞く

UTokyo Compass 2.0に記された計画を実行するため、2025年4月、広報戦略本部はコミュニケーション戦略本部に改組されました。世界のリーディング大学としてのブランド・レピュテーションを確立し、大学の新たなブランド確立のためのマネジメントシステムを構築する組織です。コミュニケーション戦略を担当する理事、本部長、副本部長が、今回の改組について思いの丈を語ります。



理事
岩村水樹
IWAMURA Miki

広告、外資のコンサルティング、ブランド企業、大学教員などを経てグーグル アジア太平洋・日本マーケティング担当バイスプレジデント。2021年4月に本学理事（総長ビジョン推進担当）に就任。著書に「ワーク・スマート」（中央公論新社、2016年）ほか。本学教養学部卒。

広報からコミュニケーションへ

岩村 「広報」は伝えたいことを広く報じるという意味ですが、「コミュニケーション」は、知らせるだけではなく、相手に伝わるころまでを含めた言葉です。「伝える」で終わらず「伝わる」までを気かけるとのこと。UTokyo Compassが重視する「対話」と徹底する言葉だと思います。

東大が今後も世界に貢献するには社会としっかりつながらなければなりません。それには、大学の活動を社会の皆さんに理解いただく必要があります。社会が大学に何を求めるのかを理解し、活動をストーリーとして打ち出すことが重要ですが、これまではそこが十分ではありませんでした。国内では知名度が高く、何か発信すればある程度注目してもらえましたが、時代は変化しています。学生や卒業生、地域や企業の皆さんなど、学内外のステークホルダーとより密に交わる必要があります。

グローバルな視点では、留学生や研究者が主なステークホルダーです。観光面に限らず、研究・教育の点でも日本には魅力が多々あります。たとえば、AIの利用を厳しく規制する国が多いなか、日本ではAI推進法が5月末に成立しました。日本に来る

ことはAI研究者により影響を及ぼすでしょう。また、紛争が世界各地で続くなか、日本がセーフハーバーになっている面もあります。あるYouTuberは、欧州には過去、米国には現在、中国には未来しかないが、日本には過去も現在も未来もある、と話していました。時間的にも多様な視点が混在する国だと思います。その部分が伝わるようにすることが重要です。誰に何を伝え、結果としてどのような影響を与えたのかまでを想定するのが「戦略」です。

河村 岩村理事が4年前から繰り返し話していたことですが、ひとりよがりにならず、相手に思いを馳せながら伝えるのがコミュニケーションなのだということがやっと腑に落ちてきたように感じています。

活動の背景にある愛も伝える

岩村 たとえば、新しいテクノロジーを伝える際、その中身を説明するだけでは不十分です。それがどんな価値をもたらすのか伝わって初めて、聞き手は自分ごととして捉えることができます。なぜ研究しているのかの部分も重要です。研究者は突き詰めると世界をよくしたいと思って研究しているはずですが、従来の広報ではその辺りがあまり伝えられなかったかもしれません。

少し大げさですが、研究の背景には愛があるはず。理事として4年間多くの先生と話してきましたが、ほとんどの先生はそうした気持ちで研究していると感じます。それを隠さずに伝えることが共感につながります。UTokyo Compassのもと、大学経営でも高い志をもって難しいチャレンジをしている姿を伝えたいとあらためて思います。

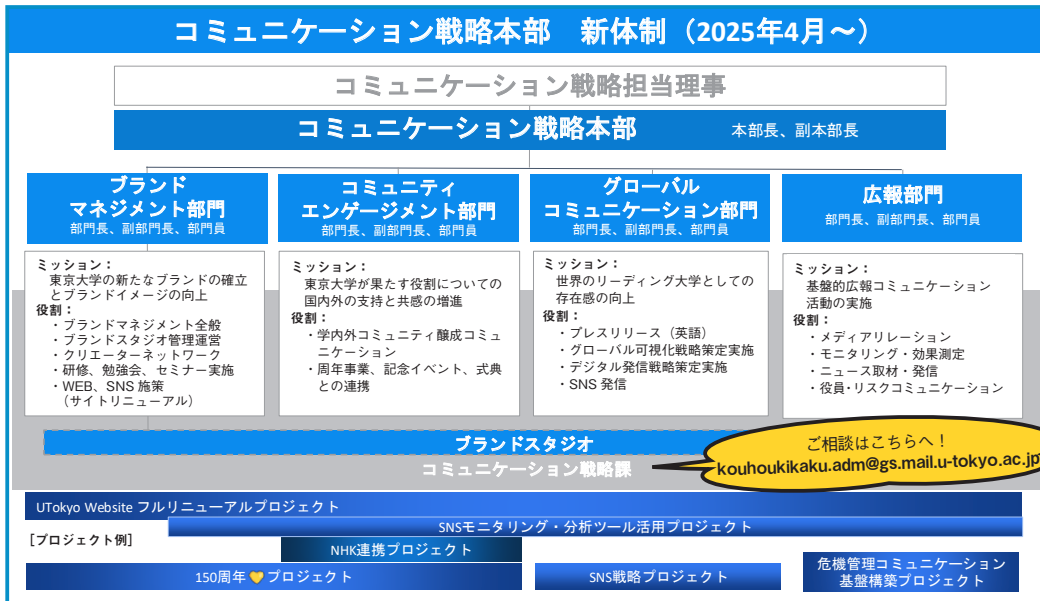
河村 いま、外部の専門人材を巻き込むという大学全体の方針があります。いろいろな立場の人がチームを組んで働く姿を他部局・部署に先んじて見せるのもこの本部の重要な役割かもしれませんね。

岩村 東大のブランドを作るのは基本的には大学の中にいる人たちです。中の人と外部の専門人材が混ざり、新しい東大の魅力が外に染み出していくことが大切です。

学生スタッフとともに外へ

猪熊 私も卒業生の一人ですが、これまで母校への関心が薄かったんです。学内の多様な活動ぶりを知るにつけ、いま自分が目の当たりにしていることを世の皆さんに伝えたいという気持ちが強まっています。

私が率いるブランドマネジメント部門は、大学のブランドを形作るコミュニケーションを進めます。東大人はバラバラで一つに



←コミュニケーション戦略本部の下には4つの部門が置かれています。イメージ向上を担う**ブランドマネジメント部門**、支援と共感の増進を目指す**コミュニティエンゲージメント部門**、世界における存在感の向上を狙う**グローバルコミュニケーション部門**、そして従来の基盤的広報活動を行う**広報部門**です。4つの部門をまたがる形で、コミュニケーション手法の企画や制作やコンサルティング業務を行うブランドスタジオがあり、本部コミュニケーション戦略課（旧・広報課）が事務を担当します。デザイン、ウェブ、広告、リスク管理など、関連分野のプロたちが加わり、アドバイスを進めています。

まとめるのは難しいといわれますが、多様な人たちの気持ちが一になるような、大学全体の方向性を作るキャンペーンを考えています。主な対象は在校生・卒業生。在校生を大事にし、大学と心の結びつきを感じてもらおうことが、卒業後も大学との縁を保つことにつながります。

活動の基盤となるのは昨年7月に発足したブランドスタジオです。学生スタッフを募集し、原稿執筆や動画制作を通して大学の活動を外に発信してもらい、コミュニケーション活動を学生の視点から支援してもらいます。学生、外部の専門家、学内の教職員がともに活動する姿も見えようにします。ブランドスタジオ1周年のタイミングで、プレスリリースも出す予定です。**岩村** まずは2万人の在校生、20万人の卒業生の皆さんが東大を誇らしく感じ、東大のコミュニティにいることを誇りに思えるようにしたいですね。わくわくすることをやっている人が溢れる大学というイメージを外に打ち出していきたいんです。

河村 学術に目を向けると、複雑な社会問題を解決するには一つの分野では無理で、コミュニケーションを進めて多くの分野が結びつかないといけません。そのためのプラットフォームともなるのがこの本部ですが、私たちだけでは何も進められません。学内の皆さんに仲間になってほしいんです。私たちが何を目指して何を行っているのか、各部局に説明して回る全学キャラバンを7月から行います。150周年を見据え、皆で東大を盛り上げていきましょう。

「10%より10×」を目指そう

岩村 グーグルでよく話すのは、「10%より10×」を目指そうということです。イノベーションが生まれるのは、従来と違うアプローチをしたとき。たとえば交通事故の主因は人的ミスですが、事故を10%減らそうと考えると、ボディの改良や安全装置の追加などマイナーチェンジの話になります。でも、10倍よくしようと思えば、人は運転しないという発想が生まれる。それが自動運転の開発につながり、事故率の減少につながりました。過疎が進み、バスの本数が減って買い物難民が増えるという問題もありますが、自動運転はその解決策ともなります。耳が聞こえない人のために音声認識と文字起こしの技術が進展しましたが、それは耳が聞こえる人にも便利です。目前的課題をアイデアで解決することが大きな課題解決につながることもある。そうした発想で進んでいる研究は多いはず。

社会とつながればリソースやサポートも集まります。社会とつながることが研究のイノベーションにつながり、東大が世界のイノベーション・エンジンになることを期待しています。東大の持つ潜在能力をアンロックして解き放つために、外も中もつないでいくのが、この本部の役目です。コミュニケーション活動は東大の未来に対する投資だと思っています。この4年間、山あり谷ありでしたが、よいチームができてきました。ここから先に「リープフロッグ」があると信じています。



安田講堂のコミュニケーション戦略本部で思いを語った**岩村水樹**理事、**河村知彦**本部長、**猪熊智子**副本部長。このほか、**杉山清彦**（総合文化研究科教授）、**渡邊英徳**（情報学環教授）、**小澤みどり**（総務部次長）の3名が副本部長を務めます。「大手私立大はもちろん、他の主要国立大と比べても、東大の一般管理費支出の広告費は非常に少ないのが現状です。戦略的なコミュニケーションへの投資が必要です」（河村）

「知と革新のフロンティア共創」を開催

東大基金と東大創業者の会の共催イベント



文ジェミ ユーモアあふれるあいさつを短めに

みなさま ようこそお越しやす桂文枝ジェミと申します

文ジェミ リーダーシップの落語の大爆笑を取れる「まくら」を作って

師匠、お任せください……

スマホでAIと対話しながら高座を務める文枝師匠

5月30日、安田講堂で「知と革新のフロンティア共創～ AI・起業・グローバルが織りなす未来創造セッション～ supported by Google」が開催されました。東京大学基金と東大創業者の会による共催イベントです。桂文枝師匠と AIの創作落語、東大卒起業家のピッチセッション、女性起業家の紹介など多彩なプログラムが詰め込まれたイベントの一部を紹介します。

東大×Google×吉本

約3時間半にわたって開催された東京大学150周年応援イベント。在学生や卒業生をはじめとする大勢の観客を沸かせたのが、GoogleのAI「Gemini」（高座名：桂文枝ジェミ）と共に創作した落語を披露した桂文枝師匠です。タイトルは「リーダーシップ」。あるスーパーの社長が売り上げを伸ばすためにAIロボットを導入するという噺です。ダメだしを繰り返しながら創作した過程にも触れ、AIは考えるスピードは速いが、「間」や表情などがある笑いを作るのはなかなか難しいなどと話しました。

続いて津田敦理事による150周年関連のイベント紹介や、藤井輝夫総長によるAIやスタートアップなどについての基調講演が行われました。2024年度末時点で東大関連スタートアップの累積創出数は 638 社で、そのうち33社はIPO（新規株式公開）だと藤井総長が紹介。よりグローバルなスタートアップ支援などについても話しました。

岩村水樹理事、染谷隆夫副学長、ユグレナの出雲充代表取締役社長、モデレーターの津田理事が登場したトークセッションでは、起業の起爆剤となっているAIや東大の起業支援などについて意見が交わされました。スタートアップを担当する染谷先生は、いまや起業することは東大の学生や研究者の間では当たり前になってきていると話し、アントレプレナーシップ講座などを紹介。「若手のエンパワーメントを通じて、日本の様々な課題解決に貢献していきたい」と話しました。2005年にユグレナ

を創業した出雲さんは、当時起業は東大生のキャリア選択肢にはなかったが、20年でその景色がすっかり変わったと述べました。さらなる高みを目指すために強化すべきは、「女性」「グローバル」「笑い」だと指摘しました。

ピッチセッションには4名の東大出身起業家が登場しました。抹茶版エスプレッソマシンなどを開発、販売しているWorld Matcha 塚田英次郎さん。コールセンターのオペレーター業務をこなすAI Voice Agentを開発、提供するRechoの白寧杰さん。AIとシミュレーション技術で製造業の設計の高度化を目指すRICOSを創業した井原遊さん。「家族の健康を守る」というテーマでissinを起業した程湧代表取締役は体重計と一体となった「スマートバスマット」などを紹介。

東大出身の起業家たち

最後のセッションでは東大出身の女性起業家3名が起業した理由やこれまで経験などを語りました。シリコンバレー時代に起業のハードルの低さを実感し、帰国後にミツモアを起業したという石川彩子さんは、起業の世界に飛び込みたい人はやってみてほしい、いつかどこかに辿りつけると話しました。2014年に双子の妹とcolyを創業し女性向けコンテンツを提供している中島瑞木さんは、人口の半分は女性なのに起業家が少なく指摘し、もっと多くの女性に起業してほしいと話しました。2014年にモデラートを起業した市原明日香さんは、平坦でなかったこれまでの道のりを紹介。

大好きだというフランスの哲学者アランの「悲観主義は気分によるものであり、楽観主義は意志によるものである」という言葉を紹介し、雨が降ることもあるが、楽観を維持するという意思をもってほしいと後輩にエールを送りました。



①基調講演を行った藤井総長。②トークセッション「AIの社会実装に向けて 東大・Google・起業家が共創する未来」 ③ピッチセッション「Globalに通用する東大起業家は誰だ？」 ④女性起業家「東大出身女性起業家の挑戦」。

“伝統的酒造り”を巡り卒業生が集結

～東大蔵元会と農芸化学者が語る酒造りと麹菌～

6月8日、伊藤国際学術研究センターに辛党が集結しました。毎年ホームカミングデイに利き酒企画を出展している同窓会・東大蔵元会とディベロップメントオフィス卒業生ユニットが主催し、農学生命科学研究科が後援した伝統的酒造りシンポジウム&利き酒の会です。日本酒界のリーダー、農学者、16の蔵元、多くの卒業生が参加したイベントの中身を紹介します。



200名の定員がすぐに埋まった利き酒の会は20～30代が最多で大盛り上がり。東大蔵元会は2013年発足の同窓会組織。酒蔵を経営する東大卒業生や東大に縁のある蔵元が会員で、今回は18蔵元中16蔵元が酒を提供しました。東大蔵元会会員の銘酒一覧／鷺の尾（岩手）、新政（秋田）、出羽桜（山形）、Fermenteria（宮城）、金水晶（福島）、大七（福島）、ほまれ麒麟（新潟）、Maison Aoi（新潟）、つなん（新潟）、惣嘗（栃木）、若盛（栃木）、御園竹（長野）、800（京都）、長龍（奈良）、八咫鳥（奈良）、瑞泉（鳥取）、本洲一（広島）、喜多屋（福岡）

「日本酒には和食」は間違い？

講演にまず登壇した門司健次郎さんは、元ユネスコ大使。社会で日本酒が居場所を失いつつあるとの危機感から、日本酒造りのユネスコ無形文化遺産登録を提案したキーマンです。『日本酒外交』（集英社新書、2023年）の著書を持つ「酒サムライ」は、日本酒には和食が一番という思い込みを捨てて日本酒を真の「国酒」に、と訴えました。次に講演したのは北本勝ひこ先生。日本酒では麦偏の「麹」より米偏の「粃」のほうが本来は相応しいこと、江戸時代は赤門付近に地下式麹室があったこと、麹菌は代替タンパクとして注目されていて生協食堂でも提供予定であることなど、醸造学の専門的知見と一般層の関心を見事に結びつけてくれました。丸山潤一先生は、東大と麹菌研究は実はどちらも約150年の歴史を有することを指摘。Hermann Ahlburg、古在由直、矢部規矩治、坂口謹一郎と続く麹菌研究の系譜とともに、麹菌がビタミン

を作る仕組みを明らかにしたご自身の研究成果を紹介しました。UTCCの「博士の昔こうじ甘酒」には150年に迫る東大の麹菌研究の成果が濃縮されているのです。

日本酒は自由の酒である

パネルディスカッションには、東大蔵元会から4つの酒蔵の代表が参加。お気に入りのチーズはいつもワインではなく日本酒と合わせて楽しむという農学生命科学研究科長の東原和成先生の司会のもと、酒トークを繰り広げました。「鷺の尾」の工藤朋さん（2003年工学部卒）は、アマチュア無線とアカペラに親しんだ学生時代を述懐。岩手の米ではよい酒が作れないと言われるなかで全国新酒鑑評会の金賞を受賞し、面識のない地元の米農家が喜んで酒蔵に来てくれた際の感激を紹介しました。「新政」の佐藤祐輔さん（1999年文学部卒）は、就職せず物書きとして暮らすなかでたまたま飲んだ静岡の「磯自慢」に感動して実家の酒蔵を継いだという半生を紹介。古いマ

ニユアル車を苦勞して調整して走のような面白さが日本酒造りにはあると語りました。「金水晶」の斎藤美幸さん（1988年教養学部卒）は、家業を継ぐのが嫌でテレビ局で報道の仕事をしたものの、造り酒屋が減って福島市の最後の1蔵になったのを機に義務感から継いだというエピソードを紹介。造り酒屋は福島を伝える仕事だといまは信じていると誇り高く宣言しました。「大七」の太田英晴さん（1985年法学部卒）は、ワインは運命の酒だが日本酒は自由の酒であるとの持論を紹介。ブドウの出来に大きく左右されるワインと違い、米の出来より人の裁量で決まるのが日本酒なのだと補足しました。口噛み酒から生酛、吟醸と螺旋状に上昇してきた日本酒。海外には甘味、塩味、酸味、苦味しか感じない人もおり、旨味を感じられる日本人がこの味覚をもっと発信しないといけなと語りました。

芳醇な言葉が溢れた農芸化学と日本酒の夕べ。次回は10月18日のホームカミングデイ（→p.9）の利き酒企画で一献を。



海と希望の学校 ― 震災復興の先へ ―

第38回

大気海洋研究所と社会科学研究所が取り組む地域連携プロジェクト——海をベースにローカルアイデンティティを再構築し、地域の希望となる人材の育成を目指す文理融合型の取り組み——です。東日本大震災からの復興を目的に岩手県大槌町の大気海洋研究所・大槌沿岸センターを舞台に始まった活動は、多くの共感を得て各地へ波及し始めています。

世界規模の気候変動を地域で考える

大槌沿岸センター（以下、センター）に着任して2年が経ちました。前職（北海道大学）から一貫して、気候変動が海洋生物や沿岸社会に及ぼす影響の評価・予測・対策に関する研究をシームレスに行うことを意識してきました。地球温暖化や海洋酸性化は地球規模で起こっている現象ですが、地球温暖化は大雨などの局所的な極端現象や、それに伴う洪水などの災害の頻度や強度を増大させること、また沿岸域では海洋酸性化に加えて陸域からの物質の流入が海水のpHを下げる沿岸酸性化という現象も起こっていることが知られています。つまり、これらの問題の解決には、世界中で人為起源CO₂の排出削減に取り組むことに加え、地域の実情に応じた対策を地域ごとに講じる必要があるということです。

地球温暖化や海洋酸性化の問題を自分ごととして捉えるためには、まずは目の前で起こっていることを知ることが大切です。そこで、大槌高校はま研究会との共同研究として、地元の高校生と一緒に海水分析や海洋観測機器を用いた連続観測を行い、大槌湾での地球温暖化や海洋酸性化の進行状況を調べることから始めました。これらの現象の長期傾向を明らかにするためには、観測を長期間継続してデータを蓄積していく必要があります。この高大連携の研究は今後も継続していく予定で、今後は市民科学的な要素も加



大槌高校はま研究会気候変動班の活動の様子

大気海洋研究所附属
国際・地域連携研究センター
地域連携研究部門 教授

藤井賢彦



えて実施していきたいと考えています。



センターは三陸ジオパークのエリア内にあり、その縁もあり「ジオパーク認定ガイド」認定講座の講師や日本ジオパーク全国大会のパネリストなど、ジオパーク関連の仕事をお引き受けする機会も増えてきました。地球惑星科学科出身ということもあり、元々ジオには興味がありましたが、趣味の域に留まっていたところ、世界ジオパークネットワークでも「気候変動への関心を高めること」が重点分野のひとつに掲げられていることを知り、仕事としての大義名分を得られた安堵感をもって取り組んでいます。最近は大分県のおおいた姫島ジオパークや鹿

児島県の三島村・鬼界カルデラジオパークの海底から火山性のCO₂が噴出している海域を、海洋酸性化が進行した「将来の海」に見立て、その海域の生態系を詳細に調べることで海洋生物の海洋酸性化影響を推測する研究を、地元の関係者や他大学・研究機関と行っています。

日本のジオパークの多くはいわゆる地方に存在するため、ジオパークに関する雇用は自ずとその地域に生まれます。博士課程修了後にジオパーク専門員としてそれぞれの地域に就職するケースもあり、数値では測れないものの、多様なキャリアや高い専門性を有する有為な人材の存在はそれぞれの地域に好影響をもたらしていると思います。地域の研究拠点の一員として、そして大学院教育に携わっている者として、地域から学びつつ、地域に根差した諸学術分野の専門家の人材育成を通じて地域に貢献できないかと模索しているところです。



2024年の日本ジオパーク全国大会でパネリストとして登壇
(前列左から2人目が筆者。写真は大会報告書より転載)



スキューバ潜水による海洋調査の様子



「海と希望の学校」公式 X (@umitokibo)

バックナンバー→www.u-tokyo.ac.jp/ja/society/aid/sanriku.html

制作：大気海洋研究所広報戦略室（内線：66430）



UTokyo

第35回

バリアフリー最前線!

障害がある職員のお仕事拝見⑩

柏・環境整備チーム
の巻

柏キャンパスの環境を整える

2010年に発足した柏地区共通事務センター環境整備チーム。11年目のベテランから4月に入職したばかりの新人まで、計12人の知的障害がある職員と3人のコーディネーターから成るチームです。3チームに分かれて、除草や落ち葉の回収、腐葉土作り、植栽、側溝清掃など、柏キャンパス全体の環境美化を行っています。

「除草しないと、雑草などが伸び放題で大変なことになってしまいます」と話す高田丈さん。石畳の隙間やツツジの植込みのなかなど、あらゆるところから伸びてくる雑草をきれいに除去しています。暖かい季節になると伸びてくる芝は、芝刈り機やハサミなどを使って刈り、熊手などを使って取り残しのないように丁寧に回収していきます。

「秋には大量の落ち葉の回収があります。冬は側溝に溜まった枯れ葉や泥などをすくい出したりしてます。きれいに、丁寧に作業することを心掛けてます」と草島元弥さん。

花壇づくりも環境整備チームの仕事です。これまで、ビオラ、マリーゴールド、ペンタス、サルビアなどを植え、水をやり、定期的に花がら摘みも行ってきました。橋村優希さんは、水をやりすぎても花は枯れてしまうので、タイミングを見計らうことが大切だと話します。他にも、図書館での返本や文書館の書棚清掃などを担当しています。

チームとして常に心掛けているのは、「コミュニケーションと協力」、「責任をもって確実に仕事を行うこと」、「健康と安全管理」です。大変そうな作業をしているメンバーがいたら、手を貸す。草刈り機などの機械を使う時などは特に安全確認に気を配るといったことです。今年度から業務が拡大し、柏IIキャンパスも担当することになった環境整備チーム。「柏IIキャンパス内の環境を整え、きれいにする」という目標を今日も遂行していきます。



(後列左から時計回り) 篠原皓紀さん、大沼悠梧さん、茂木佑太さん、早嶋謙太郎さん、杉江亮太さん、山口稔大さん、草島元弥さん、増山大輔さん、高田丈さん、川崎樹さん、鈴木海斗さん、橋村優希さん。

蔵出し!
文書館The University
of Tokyo
Archives

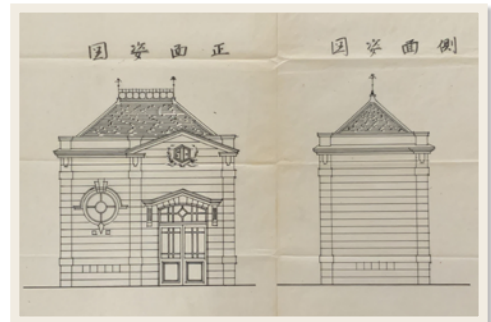
第56回

収蔵する貴重な学内資料から
140年を超える東大の歴史の一部をご紹介します

お蔵入りになった蔵

当館は経理部管財課が保管していた、国有財産に関する資料群を所蔵しています(S0040『経理部管財課旧蔵資料』)。明治中頃から昭和初期にかけての、土地や建物の取得、施設の管理に関するもので、図面類が多く含まれているという特徴があります。

画像は中でも「雑件」がまとめられた簿冊に綴じられていた図面の一部です。わずか4坪弱のこの小さな建物、何を目的とした施設だと思いませんか？



「自明治四拾参年七月至大正十二年十二月 雑件書」(S0040/0014)より

正解は附属病院に氷を卸していた業者が設置する、貯水庫兼配水所です。治療に用いる氷の確保と保管は附属病院にとって長年の課題のひとつだったらしく、明治14年に小石川植物園の池から氷を採取してよいかを問い合わせた文書も当館に残っています。

図面は大正4年に作られたもので、当時は氷を製氷会社の蔵から購入し、構内にある薬局の倉庫に運搬のうえ保管していました。しかし、気温が高いと運搬中や保管の間に融けてしまうため、どうしても多くの損失が出てしまいます。そこで、大学構内の土地を無料で貸し付け、業者に配水所を設置してもらい、必要な分だけをその都度購入しようと考えたようです。

簿冊には、建物の仕様書案も一緒に綴られており、「木造屋敷人造石張り」であること、入口はガラスを嵌め込んだ引き分け戸であること、床にはコンクリートを用いることなどが書かれています。

しかし残念ながら、この建物が実際に建てられたことは確認できず、構内に配水所を確認できるのは大正14年以降になります。土地の貸付け料が、大正4年の案では無償だったのに対し、大正14年には有償となっていますので、無償では許可が下りなかったと推測されます。大正14年の貸付けは、昭和3年に返地となっていますので、業者としても採算が合わなかったのかもしれませんが。

(特任研究員・小澤 梓)

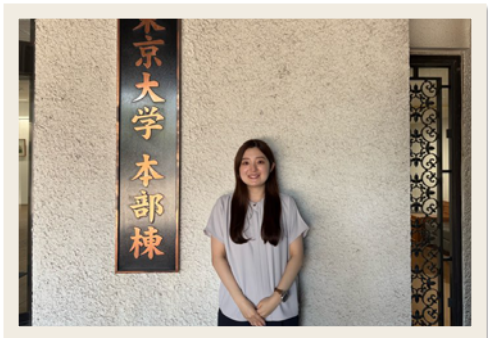
東京大学文書館

ワタシのオシゴト 第229回

RELAY COLUMN

資産活用推進部 清水珠子
資産活用課資産活用チーム

魅力満点！資産活用課のオシゴト

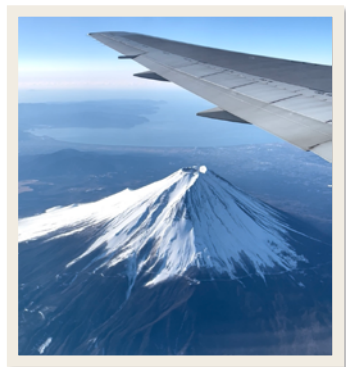


本部棟が私のオシゴトバです！

ある日は学内に設置されている自販機の契約業務、翌日は隣接地との境界確認、翌々日は資産除却に関する資料作成……毎日全く異なる業務に携われることがワタシノシゴトの魅力です。この4月で配属2年目になりましたが、昨年度経験した業務と同様の案件はほとんどなく、先輩方が残してくださった貴重な資料がお守り替わりです。

学生時代は全く異なる分野を専攻していたため、契約業務では慣れない法律用語と睨めっこし、土地関係の業務ではひたすら写真と図面を照らし合わせ、資産除却業務では工事資料片手に登録資産の搜索（昭和初期に作成された資料を確認することも）。脳のキャパシティは常に限界を超えていますが、日々全学的な業務に携われることにやりがいを感じています。

入職当時、右も左も分からなかった自分をあたたかく迎え入れてくださった部の皆様に少しでも貢献できるよう、これからも日々努めてまいります！



旅行中、偶然撮れたベストショットです！

得意ワザ：アイスカフェラテを二層にそそぐこと
自分の性格：心配性なのに大雑把
次回執筆者のご指名：近藤里帆さん
次回執筆者との関係：豊富な知識で助けてくださる先輩
次回執筆者の紹介：ユーモアあふれる優しい方です！

デジタル万華鏡 第46回

東大の多様な「学術資産」を再確認しよう

情報学環・学際情報学府
図書チーム係長

五十嵐裕一

情報学環のデジタルアーカイブ

2024年3月に情報学環附属社会情報研究資料センターで運用しているデジタルアーカイブ、Digital Cultural Heritage (DCH) をリニューアルし、より使いやすくなりました。また、ここで公開している資料画像はクリエイティブ・コモンズ・ライセンスの「CC BY」※相当で利用可能です。

同月、DCHに新たに登録された資料に新聞『日本』があります。新聞『日本』は1925年に創刊された、日本主義を思想の根幹とするメディアです。政府要人からの支持を得て、自由主義や共産主義を厳しく批判し近代天皇制国家を思想的に支える立場から、そうした社会の雰囲気を作り出す役割を果たしてきた資料として貴重なものと言えます。この新聞は所蔵館がほとんどなく、資料の劣化も激しいことからデジタル化対象となりました。センター所蔵の1930年から1935年のものが閲覧可能です。2025年1月からは東京大学デジタルアーカイブポータルにも掲載されています。



新聞『日本』3538号（1935年）部分

また、かつて情報学環がデジタル公開していた総合図書館所蔵の館史資料画像が2025年3月に東京大学デジタルアーカイブポータル「総合図書館所蔵館史資料コレクション」の一部として再公開されました。主なものは関東大震災からの復興期に作製された建物や家具などの設計図面です。画像はこのうちの家具設計図のひとつで、カード整理室用の書棚とブックトラックのイメージ図と寸法が記載されたものです。

見る、調べるが楽しめるデジタルアーカイブをどうぞ活用ください。



家具設計図

<https://dch.iii.u-tokyo.ac.jp/>
<https://da.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/portal/collection/kanshi>

※クレジットの表示を条件に自由に使用できる

インタープリターズ・第214回 バイブル

総合文化研究科 教授
科学技術コミュニケーション部門

大島まり

継続は力なり

今年も駒場リサーチキャンパス公開が、5月30・31日に開催された。両日ともに、あいにくの雨と風。しかも寒かった。例年になく悪天候にもかかわらず、来場者数は例年と変わらず、盛況であった。特に、事前登録いただいた中学生、高校生や学校の先生の当日ドタキャンはほぼなく、2000名を超える参加であった。

おそらく東京大学の施設を中学生に公開しようとした最初の試みは、生産技術研究所（生研）が六本木にあり、私が助手を務めていた1990年後半ではないだろうか。生研は第一木曜・金曜に一般公開として研究者や大学生を対象に行っていた。ほぼ全研究室が展示し、研究室総出で説明していた。研究を広く知っていただけでなく、共同研究などのきっかけにもなっていた。

一方、六本木の近くには多くの中学校や高校があったので、若い人にも研究を知ってもらいたい機会になるのでは、と思った。当時の所長だった鈴木基之先生に相談し、許可を得ることができた。Scientists for the Next Generation (SNG) というボランティア組織を立ち上げ、職員や学生の協力を得ながら、1997年に「中学生のための生研公開」を初めて行った。近郊の中高校生約80名が参加し、中学生向けの見学コースを周ってくれた。WEBのない時代だったので、参加のお願いに学校訪問し、ポスターやちらしを郵便で送った。女子校に説明のために電話したところ、あやしいと思われたのか、電話をたたき切られたことがあった。

それから生研は駒場に移転し、ボランティア組織だったSNGは次世代育成オフィスとして組織化された。駒場リサーチキャンパス公開として先端研との共催での金曜・土曜の開催となった。遠方からもさらに多くの中高生が訪れるようになったが、新たなチャレンジも生じた。例えば、学校は団体で参加し、一般来場者よりも滞在時間が長いため、中高生がたむろして困るというクレームがあった。そこで、企業に協力いただき、地下のアトリウムのスペースを活かして、企業ブースを設けHands-onの実習を企画していただいた(写真)。おすすめマップの作成や、理科教室の開催など、



広いキャンパスを有効活用して、多様な視点から研究を見てもらえるような様々な工夫も行ってきた。

年々、中高生の参加は増加し、企業の参加も増えている。学びが大きく変わるなか、「継続は力なり」でキャンパス公開の与える影響も大きくなっているのでは。

HCD編 まきんのき

寄付でつくる東大の未来

第68回

ディベロップメントオフィス
アソシエイトディレクター

計良圭一

“オール東大の祭典”にご参加を

“オール東大の祭典”として毎年大きく盛り上がるホームカミングデイ (HCD) が、今年は10/18に開催されることになりました。企画募集も始まったばかりですので、学内のみなさまの参加をぜひお待ちしております！

前は118のプログラムが集まり、来場者は約8000名。卒業生をはじめ、そのご家族や地域の方々、そして東大に関心をお持ちの多様な方々が本郷キャンパスを訪れました。ホームカミングデイは、「東大（＝我々）はなにをやっているのか？」を世の中に広くアピールし、大学への共感と支援を得るための重要なチャンスです。

昨年プログラムをご紹介しますと、東大蔵元会の利き酒、東大三四郎会のタルトづくり体験、馬術部の「本郷で馬に乗ろう」乗馬体験、ニューロインテリジェンス国際機構のVR体験などのブースが銀杏並木に並びました。文京区商店街からも飲食・物販など10店舗が参加し、クラフトビール、もつ煮、伝統工芸品の販売がありました。

教室では、東大落語会寄席、黒田東彦前日銀総裁の講演（東京銀杏会）、JAXAシンポジウム（電気系同窓会）などが行われました。大学と連携している地域の物産マルシェ（農学部）、地震研究所教授による講演会、小学生向けの内容で毎年好評の「家族で体験物理学のワンダーランド」（理学部）といったアカデミックな内容を研究者が一般の方にわかりやすく解説する企画などがありました。

伊藤謝恩ホールでは赤門音楽祭を開催。東大弦楽団OB/OG会、合唱同窓会、東大教職員バンドのほか、文京区立本郷小学校合唱団の生徒たちも登場し、地域の方にも東大に親しんでいただく機会となりました。

夕方には来場の卒業生たちが安田講堂前に集まり、東大の歌『ただ一つ』を応援部のリードで斉唱。同窓生たちが母校を想う美しい瞬間となりました。今年も行う予定ですので、ぜひご参集ください。

参加は部局、研究室、部活動、個人的なサークルなど形式を問いません。いまの仲間や、懐かしい同期をお誘いして、全員で東大を盛り上げていきましょう。詳細は下記QRコードからご確認いただけます。まずは楽しいことやってみようかな、というお気軽なお気持ちからぜひ！



HCD
企画参加
はこちら

←「東大蔵元会」の
利き酒会は銀杏並木
の人気企画です。

トピックス 全学ホームページの「UTokyo FOCUS」(Features, Articles)に掲載された情報の一覧と、そのいくつかをCLOSE UPとして紹介します。

掲載日	担当部署・部局	タイトル（一部省略している場合があります）
5月13日	本部コミュニケーション戦略課	本学のDEI推進について（総長メッセージ）
5月16日	本部学術振興企画課	国立大学法人東京藝術大学との包括連携に関する協定の締結について
5月16日	本部コミュニケーション戦略課	本学に対する提訴の報道について
5月16日	本部奨学厚生課	多子世帯の授業料等無償化 追加募集について（5月19日～6月6日）
5月16日	未来ビジョン研究センター	SDGsシンポジウム2025 を開催
5月20日	広報室	関東ローカルの大学になりつつある＝FairWind 頭でっかちが多いと思われがち＝玄田有史 図書館施設の開館時間が短くなっている＝坂井修一 認知症の患者が増えている＝岩坪威／「淡青」50号「悩める東大」
5月21日	本部学生支援課	東京大学ヨット部による文京区民向けのヨット試乗会を実施！
5月26日	本部国際研究推進課	東京大学がAUAサミット2025を主催
5月27日	総合文化研究科・教養学部	バーレーン王国の国王顧問が本学を訪問
5月28日	広報室	誰もが持つ「ペプチド」で耐性菌に挑む
5月29日	新領域創成科学研究科	「柏キャンパスGX推進プロジェクト」シンポジウムを開催
5月30日	総合文化研究科・教養学部	アラブ首長国連邦（UAE）ムハンマド・ビン・ザーイド人文大学顧問が来訪
6月4日	本部社会連携推進課	BSよしもと『東大吉本対話 vol.3』放送のお知らせ
6月6日	広報室	グローバル・コモンズと海洋科学 総長特使対談 道田豊×石井菜穂子×河村知彦
6月9日	教育学研究科・教育学部	「初等中等教育における探究学習への支援プロジェクト」を新たに開始
6月9日	教育学研究科・教育学部	大学院教育学研究科・教育学部留学生懇談会を開催
6月11日	総合文化研究科・教養学部	言語情報科学専攻の三田雅人さんが言語処理学会で最優秀賞を受賞
6月11日	本部渉外課	Sky株式会社とネーミングプランの協定を締結



CLOSE UP 東京藝術大学と包括連携に関する協定を締結

（本部学術振興企画課）



SusHi Tech Tokyo 2025で会談し、調印式で握手を交わした藤井総長と日比野学長

東京大学と東京藝術大学は、5月8日に包括協定を締結しました。両大学は、これまで共同研究や学生交流等の面で連携を図ってきましたが、それぞれの特色及び教育研究資源を活かすことで、これまで以上に研究、教育、地域貢献分野で連携及び協力するため、以下の項目で包括的な連携協定を締結しました。

- [1] 教職員の交流に関する事項
- [2] 学生の交流に関する事項
- [3] 教育に関する事項
- [4] 共同研究に関する事項
- [5] 地域社会への貢献に関する事項
- [6] 施設に関する事項
- [7] その他必要と認める事項

今後、両大学が、それぞれの個性・特色を

生かした連携を進め、その知見を広めつつ、多様で積極的な活動を展開することで、人材育成及び地域社会への貢献を目指します。

5月8日、本学の藤井輝夫総長と東京藝術大学の日比野克彦学長は、有明の東京ビッグサイト（東京国際展示場）で行われたアジア最大級のスタートアップ・カンファレンス「SusHi Tech Tokyo 2025」の「東京からアカデミアのリーダーが語る、未来社会の変革を担う人材育成」セッションに参加。見えないものを見えるようにする科学の力と、見えないものを見続けるアートの力とを結びつけながら、未来を担う人材をともに育成していこうと語り合い、セッションの最後に両大学の包括連携協定の調印式を執り行いました。

表紙について

今号の表紙は、5月30～31日に行われた駒場リサーチキャンパス公開2025から、先端科学技術研究センター3号館のバルーンアート展示です。毎年恒例の須原三加さん（Loved up Balloons代表／大気海洋研究所出身）による4m超の巨大作品。今回のモチーフは、明治期のドイツ・カールツァイス製の顕微鏡と顕微鏡で見た微生物でした。「先端研の顕

微鏡」と題し、先端研の各研究室にある顕微鏡を通して見える世界の数々がパネルで展示されました。「ここで、未来に挑む」をテーマに開催された今年の駒場リサーチキャンパス公開。天候には恵まれませんでした、多くのお客さんが訪れ、普段は入ることのできない研究室の様子や、未来に挑む最先端の研究の成果を見学しました。



©2010 熊本県くまモン
地域連携協定の各地から集ったご当地キャラ（左から、セロリン、おづみん、フラおじさん、ひゃくまんさん、杉山正和所長とせんタン、くまモン＝せんたん、 研究員、かまりん、めじろん、うーたん）



CLOSE UP 東京大学がAUAサミットを初主催

(本部国際研究推進課)



今回はAUAの加盟16校のうち14校が参加。Presidents Forumのセッション1の様子はNHK教育テレビジョン（Eテレ）の番組として放送される予定です

東京大学は、4月17日～18日に本郷キャンパスの山上会館でアジア大学連盟（Asian Universities Alliance/AUA）の年次学長会議（AUA Summit 2025）を開催しました。本学は2017年のAUA発足当初からの加盟校で、今回が初めての公式会議の主催となりました。開会挨拶は林香里理事・副学長が、総合司会は北村友人総長特任補佐を務めました。

17日にはAUAの運営について話し合うBoard Meetingを開催し、昨年のAUAの成果を総括するとともに、今後の資金調達、加盟校拡大、活動計画、2026～2029年の活動テーマなどについて活発な議論を行いました。

18日にはPresidents Forumとして3つのセッションを実施。セッション1の「Promise and Risk of Artificial Intelligence in Higher

Education」（司会：東京カレッジ 江間有沙准教授）には、藤井輝夫総長がほかの加盟校代表と登壇し、AI社会における高等教育の行方について議論しました。セッション2は「Ten Years of SDGs: Universities' Role in Achievements and Challenges」（司会：新領域創成科学研究科 亀山康子教授）、セッション3は「From Campus to Startup: How Universities Drive Innovation and Entrepreneurship」（司会：各務茂夫特命教授）をテーマに、活発な議論を展開。続いて、松田陽総長特任補佐による東京大学史についての講義とキャンパスツアーを実施しました。

19日には首都圏外郭放水路でオブショナルツアーを実施し、沖大幹総長特別参与による講義と調圧水槽見学を行いました。



CLOSE UP アラブ首長国連邦の人文大学顧問が来訪

(総合文化研究科・教養学部)



シェイフ・ムハンマド・ビン・ハリーフア学長顧問（左から4人目）を出迎える寺田研究科長（右から4人目）
(撮影：上杉隆寛氏)

アラブ首長国連邦（UAE）のムハンマド・ビン・ザヤード人文大学（MBZUH）より、シェイフ・ムハンマド・ビン・ハリーフア・アール・ナヒヤーン学長顧問を団長とする訪問団が、5月27日に駒場キャンパスに来訪し、総合文化研究科の寺田寅彦研究科長と学術交流について協議を行いました。

教養学部とMBZUHは2024年6月に3年間の部局間協定を結び、本年2月には本学の中央地域研究センター（UTCMS）の木村風雅助教がMBZUHで講義を行うなど、交流を進めています。今回の来訪は、日本国内を巡り

ながら学習を行う研修としてMBZUHが企画し、10人の学生を伴って来日した機会に相互交流の一環で実施されたものです。

会談にはMBZUHよりスターリン・ヤンセン准教授が、本学からは部局間協定締結時に研究科長だった真船文隆副学長、UTCMSから高橋英海センター長、森元誠二客員教授、鈴木啓之特任准教授、木村風雅特任助教が同席しました。学術交流のあり方について意見交換が行われ、主に人文系の分野で、寛容性、共生、信仰、伝統などのテーマで学生交流や語学留学、共同研究の検討が行われました。



CLOSE UP ヨット部による文京区民向けヨット試乗会を実施

(本部学生支援課)



(左) ヨットの試乗
(右) レスキューボートの試乗

5月11日、神奈川県葉山町にある葉山港において、本学ヨット部による文京区民向けのヨット試乗会が実施されました。本試乗会は、文京区の後援をいただき、地域社会への貢献活動として実施されたものです。当日は、10名の文京区民（うち小学生以下4名）に葉山までお越しいただき、ヨットとレスキューボートへの試乗を行いました。天候に恵まれ、試乗会は大変盛況のうちに終了しました。試乗会を通して区民の皆様同士の交流が生まれるなど、区民の皆様にとって有意義な時間を過ごせたようです。



UTokyo しんどい朝に、ミドリムシの力を!!

深夜2時、推しクラブのキックオフ。画面の向こうで世界が燃える頃、現実では翌朝9時の会議が待っている——。社会人欧州サッカーファンにとって、もはや勝敗より大事なのは“翌日に響かない眠り方”。やや極端な例ですが、「睡眠の質」「疲労感の軽減」「ストレス緩和」は、誰にとっても大切なはず。UTCC×ユーグレナより、そんな悩みに応える機能性表示食品サプリメントが登場！ミドリムシ由来の力で、日々をより健やかに。(坂)



ユーグレナ・サプリメント

90粒入り・4,860円（税込）

UTCCからのお知らせ



→オンラインストア



変わること

AIの研究・教育に携わっていて痛感するのは、「学べきこと」が急速に変化しているということです。10年前には、ディープラーニングの出現が大きな変化をもたらしましたが、さらに生成AIの登場で様相は一変しました。言語処理やロボットなど多くの分野が急速に変化しています。技術の活用も、事前学習、事後学習というパラダイムに変わり、APIを活用したアプリ開発も容易になりました。

学生による生成AIの活用も急速に進んでいます。いろいろな人の話から総合的に推測するに、学生は社会のなかで最も生成AIを活用しているカテゴリーのひとつだと思います。課題提出やテスト準備の場面で、おそらく私たち教員が気づかないほど徹底的に活用されています。オンラインテストを生成AIを使って答えるという「悪い」使い方もされていると思いますし、生成AIを使って課題提出のレポートも作成されています。さらには、それが生成AIで作ったものだとバレないような工夫も頑張っているはずです。そして、口頭試問に備えるため、レポート内容を自分に分かりやすく説明させるといった使い方もされているでしょう。あるいは、講義資料や教科書を読み込ませ、要点を自分に説明させ、分からないところについて対話することで、文章全体を読まなくても短時間で効率的に内容を掴むということも行われているはずです。

こうした学び方は、「手を抜いている」と見えるかもしれません。しかし考えてみると、政治家や経営者などの社会の重要な意思決定

者は、「レク（レクチャー）」を受けることが当たり前です。会議前に担当者から要点の説明を受け、いくつか質問を交えて理解を深めます。こうした短時間での効率的な知的インプットの方法を、学生も個人で実現できるようになったと考えることもできるのではないのでしょうか。学び盛りの若い時代から、こうした「レク」を自由自在に受けることができれば、科学技術全体、社会全体に対しての俯瞰的な理解、総合的な理解が我々の世代よりもずっと進むのかもしれない。

新しい技術が登場したとき、大人が「使っていていい・悪い」と線を引くのは、あまり意味がないように思います。私たち自身もかつてそうであったように、若い世代は新しい技術を自然に取り入れ、自分なりのやり方で時代に合った力を身につけていきます。

そう考えると、大学もまた、変化の時代にふさわしい組織へと変わる必要があります。特にAI教育においては、学年や専攻に縛られるべきではありません。「学びたい」と思った瞬間に学べる環境を整えることが重要です。若い人が教えること、実践的であること、形式にとらわれないことも大切です。

私の研究室では、学内外のたくさんの方にご指導をいただきながら、制度の枠を超えた挑戦を続けています。AIという変化の象徴を通じて、大学全体が次の時代にふさわしい姿へと変わっていくことを願っています。

松尾 豊
(工学系研究科)

